コレンテ　vol. 45　n.408　novembre　2024

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑭

＊バッカスに憧れて＊

緋月　まや

イタリアはワイン大国である。陽気なイメージも手伝って、イタリア人は毎日浴びるほどワインを飲んでいるかのように思われがちだが、少なくとも、私はまだそんなイタリア人を見たことがない。イタリア人の大半は、私のようなワイン好きからすれば、何のためにイタリアに生まれてきたのかと思うほどちょっとしか飲まない。私だけではない。お酒好きの日本の友人はみな、イタリアの宴席では飲み足りないと口をそろえる。イタリアには、「とりあえずビール」という合言葉はない。ビールは、喉の渇きに任せて一気に飲み干すものではなく、ピッツァと一緒にゆっくりと味わうものである。「アペリティーヴォ（食前酒）」という文化はある。だが、これは、一杯のカクテルや発泡酒を軽食と共に、家族や友人との会話を楽しみながら、たっぷりと時間をかけていただくという文化である。通常の食事でワインをいただく時も、日本と違って、周囲の盃が空になる前に急いでつぎ足すという習慣や、つがれたらすぐにつぎ返すという習慣はない。要するに、イタリア人はお酒をガブガブ飲んだりしないのである。彼らにとって、ワインは食事に合わせて適量をたしなむものなのである。だからなのかどうなのか、イタリアの宴席で酔いつぶれている人を、私は見たことがない。いい大人が度を越して飲み過ぎ、我を失ってしまうことは基本的にないのである。そんなイタリアに――ずいぶん昔の話にはなるが――酒宴を開いては騒動を繰り返す、

【カラヴァッジョの「バッカス」】
出典元：https://it.wikipedia.org/wiki/Bacco_（Caravaggio）

困った有名人がいた。その名は、ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ。ユーロが欧州の統一通貨になるまでは、イタリア紙幣で最高額の十万リラ札には彼の肖像が印刷されていたほど、偉大な天才画家だ。

葡萄の葉の冠をかぶり、盃を掲げるワインの神「バッカス」を、私は敬愛している。フィレンツェの

ウフィッツィ美術館が所蔵するカラヴァッジョの油彩画は、数あるバッカス画の中でも、最も知名度の高い作品だろう。ルネサンス時代のフィレンツェの政務庁舎だったこの大きな美術館で、カラヴァッジョの「バッカス」は、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロらルネサンスの巨匠たちの名作を鑑賞した後、クライマックスに登場する。「よく来たね。さあ、飲みなさい」とでも言うように、グラスに入った赤ワインをこちらに向かって差し出している。美形であるかといえば、それほどでもない。容姿の美しさを競うなら、パリのルーブル美術館所蔵、レオナルド・ダ・ヴィンチ工房による「バッカス」が圧倒的にイケメンである。カラヴァッジョの「バッカス」は、ほろ酔いなのか、ふっくらとした頬を赤らめて、腫れぼったい目でこちらをじっと見つめている。ゲジゲジ眉が、なんだかイタリア人っぽい。シーツを巻き付けただけなのだろうか、真っ白な半裸の上腕には隆々とした筋骨が陰影を伴って精緻に描かれ、生身の男性の官能を漂わせる。

このリアルさ、つまり写実主義こそが、カラヴァッジョが西洋美術史上もっとも大胆な改革者と称される所以である。カラヴァッジョは 1571 年、ミラノに生まれた。遠近法の導入によって西洋絵画を技術的に躍進させたルネサンスの巨匠たちが没し、イタリア美術界は停滞期にあった。十三歳で画家を志し、二十歳過ぎでローマに出ると、瞬く間に頭角を現した。当時、教皇のお膝元であるローマでは、カトリック教会が、民衆の心をつかむ仕掛けとして、新しいスタイルの宗教画を探していた。カトリック教会のあり方を批判してドイツで産声を上げた宗教改革を発端とする、新興プロテスタント勢力の台頭に危機感を募らせていたからだ。カラヴァッジョの写実主義は、このカトリック教会の要望にぴたりと合致した。カラヴァッジョは、聖母マリアや聖人たちを美化することなく、リアルな人間として写実的に描いた。また、人物を闇の中に描き、そこに光を当てる極端な明暗対比法を駆使することで、その場面をより感動的に演出した。これらの技法は、千六百年前の聖書の世界を、カラヴァッジョの生きた時代に生き生きと甦らせる効果を生んだ。こうしてカラヴァッジョは、バロック美術と呼ばれる西洋美術史の黄金期の礎を築いていく。カラヴァッジョがいなければ、レンブラントもフェルメールも生まれなかったのかもしれない。

【ウフィッツィ美術館】

一方で、人間としてのカラヴァッジョは激昂しやすく、暴力衝動を抑えられない無頼漢であった。ひとつの作品を二週間ほどで仕上げると、一、二か月の間、お気に入りの仲間たちと盛大な酒宴を開いて遊び回っては、警察沙汰を起こし続けた。敵対する画家への誹謗中傷、居酒屋の給仕の対応に立腹、剣の携帯許可をめぐり警官を挑発、女性関係をめぐる諍い、家賃滞納で追い出された大家への報復、と原因は多岐に及ぶ。これらの事件は大半が夜中に発生していることから、お酒で暴力衝動が加速したと考えられている。そして三十四歳の時、賭け事をめぐる借金が原因か、一人の青年を剣で突き殺し、死刑宣告を受けた指名手配者となった。以降は、流浪の人生となる。最初に身を潜めたナポリでは大きな事件は起こさなかったが、マルタに移った際、性懲りもなく、敵対関係にあった騎士を仲間と共に襲撃し、大けがを負わせて投獄された。類まれな画家としての才能が故に、脱獄を導いた味方がいたとみえ、いったんシチリアに潜伏する。その後、マルタからの復讐の手を恐れ、再びナポリへと逃れたが、その甲斐もなく、居酒屋の入り口で待ち伏せしていた刺客に襲われ、自分自身も顔にひどい傷を負った。そうこうするうちに、ローマでは、カラヴァッジョのパトロンや支持者たちが教皇に恩赦を求める動きが高まっていた。恩赦を信じて、カラヴァッジョはローマに向けて旅立ったのであるが、その道中で息絶えることになる。

神話によると、バッカスは全知全能の神ジュピ

ターと一国の王女を両親に持つ。母親はバッカスを身ごもったまま、ジュピターの正妻である女神の罠にはまって焼死する。父ジュピターは母胎からバッカスを取り出すと、自分の太ももに縫い込んで臨月まで育てた。つまり、バッカスは一度死んだ後、父親から生まれるという不可思議な形で復活を遂げたのである。成長したバッカスは遍歴の旅に出る。葡萄を育て、ワインを創造すると、その醸造法を世界中に広めて回った。そして、「バッカナリア」と呼ばれる宴を開き、人生の悩み、苦しみからの刹那的解放という麻薬としてのワインの効能を武器に信者を増やしていった。このワインの効能は、古代の神々を信仰していたローマ帝国が四世紀にキリスト教を国教にすると、ワインは人間の罪を贖って磔刑に処せられた「キリストの血」であるという信仰に変容し、今に伝わるヨーロッパのワイン文化の礎を築いていく。死から再生を遂げたバッカスの姿が、磔刑後に甦ったキリストの奇跡に重ね合わされたとも言われる。

カラヴァッジョは、そんなバッカスの信者であったように、私には思われる。バッカスは豊穣の神として「正」の性質を持つが、祭の神としては酩酊による狂乱を象徴する「負」の性質を持つ。信者には寛容な一方で、その淫らな酒宴の非道徳性を非難する者は容赦なく八つ裂きにされた。この残忍性もまた「負」である。カラヴァッジョはきっと、バッカスのこの「負」の部分に惹かれたのだ。そうでなければ、生涯をかけて、あれほど深い闇をキャンバスに描き続けることはできない。人の世の倫理基準から外れた神話世界の住人、それがカラヴァッジョだったのだ。実際、ウフィッツィ美術館の「バッカス」を手掛ける前にも、「病めるバッカス」というタイトルの自画像を描いている。カラヴァッジョはきっと、バッカスに憧れ、バッカスのようになりたかったのだ。この稀代の天才は、バッカスの狂宴という手法をまねて信者を集め、芸術の神になりたかったのではなかったか。だからこそ、画家としての自分を崇拝してくれる仲間と一緒にワインを飲んで、陶酔に浸り、抑圧を解放させ、乱痴気騒ぎをした。バッカスと同様、自分の支持者であるパトロンの要望には誠実に応え、敵対する者は暴力で制した。それでもやはり、神にはなりきれず、その凶暴性がいつしか自分を破滅へ導く予感に怯えていた。そんな自分自身から逃れるためにも、刹那の甘い夢を見せてくれるバッカスの狂宴にその身を委ねたかったのだ。だから、宴の終わりを恐れて、夜のまちをいつまでも彷徨い続けたのだ。私には、そんな風に思われてならない。

＊

ウフィッツィ美術館を出た後はいつも、「モレッリーノ・ディ・スカンサーノ」が飲める店を探す。カラヴァッジョ終焉の地、トスカーナ南部の名産ワインだからだ。再生を期してローマを目指した船は、強風のため目的地を通り越した。真夏の太陽に焼かれながら海岸を歩いたカラヴァッジョは熱病に侵され、ポルト・エルコレという小さな港町で三十八歳の生涯を閉じた。狂宴の仲間はもういない。モレッリーノには、黒い果実の甘みとタンニンの渋みが溶け合い、キャンバスに向かうカラヴァッジョの喜びと血塗られた人生の悲しみ、孤独な魂の叫びが交錯する。その壮絶な生と死を偲びつつ、カラヴァッジョの「バッカス」に献杯――。

（ライター、イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ）

イタリアげんぱつ紀行　その6

＊ブラジモーネを見学する＊

二宮　大輔

2024 年 5 月に私が見学させてもらった ENEA の研究施設は、ボローニャとフィレンツェのちょうど中間に位置するブラジモーネ湖のほとりにあった。トスカーナ州の州都フィレンツェからレンタカーで連れて行ってもらったので、ブラジモーネはてっきりトスカーナ州だと思っていたのだが、調べてみるとエミリア＝ロマーニャ州だった。とにかく、イタリアを南北に走るアペニン山脈の一角、つまりかなりの山奥にあるため、アクセスは悪く、フィレンツェから車で 1 時間半ほどかかった。

こんな山奥で最先端の原子炉の研究がされているとは。そして何より、「イタリアげんぱつ紀行その5」で一つ一つイタリアの原子力発電所とその関連施設を紹介したのに、そこにはブラジモーネの名前は入っていなかった。つまりは私のリサーチ不足だったのだが、リサーチ漏れしていたこの施設は一体何なのか。

そもそもは人工貯水池として整備されたブラジモーネ湖の南側に、ナトリウム冷却高速炉の実験炉を建設する計画が 1972 年にスタートした。だが、1986 年のチェルノブイリ原発事故、それに続く国民投票の結果をもって計画は中断。その後、長年の時を経て現在のかたちになった。いったん計画が中断したために、原子力施設の解体を担う国営企業SOGINの対象にならず、知名度が低かったのかもしれない。

そして実際にそこに行ってみた印象は「古い」だった。ブラジモーネ湖沿いを車で進むと、くすんだ巨大施設が見えてくる。最先端の研究がされているものの、建物自体は 70 年代当時のものが使われており、かなり古びている。入口ゲートの受付で手続きをすませ、案内人が来るのを待つ。数分後、白髪混じりの長身のイタリア人男性が現れた。彼が運転する車の後を私たちのレンタカーで追うかたちで、敷地内を誘導してもらう。さすがに敷地内には新しい建物も存在するのだろうと高をくくっていたのだが、いざ入ってみると、どこもかしこも古い建物ばかりで、なんだったら雑草もけっこうな高さまで育っている。失礼だが、廃墟の一歩手前といった様相だ。少し不安になりながら、案内されるままにレンタカーを駐めて降車し、メイン棟に入る。長机とホワイトボードが設置された小さな会議室に通された。ここまで案内してくれた白髪の男性が改めて自己紹介をする。実は、彼こそがこの研究施設の統括者のひとりアレッサンドロ・デル・ネーヴォ氏だった。

ブラジモーネの研究施設で行われている研究は大きく分けて二つある。小型モジュール炉の研究と核融合炉の研究だ。デル・ネーヴォ氏は核融合炉部門の統括者で、少し後から小型モジュール炉部門の統括者マリアーノ・タランティーノ氏も会議室に来てくれた。トップ二人によるお出迎えだ。

【ブラジモーネの ENEA 研究施設】

ここで原子炉についておさらいしておきたい。二酸化炭素を排出しないという意味では「クリーンな」エネルギーを生み出す原子炉を改良するための研究が日進月歩で行われている。とはいうものの、研究成果を実用化するには長い年月がかかる。現在は、主流の第三世代の原発から、研究中の第四世代に移行しようとしているが、それでもまだ二十年以上かかる。そこで、原子炉を小型化してより迅速に実用化できる研究も並行して進められている。それが小型モジュール炉だ。特にイタリアでは鉛冷却高速炉の小型モジュール炉の研究が先行しており、そのスペシャリストがこの施設のタランティーノ氏というわけだ。

高速炉というのは、エネルギーを生み出す核分裂の連鎖反応で自ら核燃料を増殖させる原子炉で、自ら核燃料を増殖させるため、通常の核分裂で使用されるウランの量を格段に減らすことができる。そして鉛冷却というのは、水ではなくて液体の鉛を使って核分裂で発生した熱を冷却すること。鉛は熱伝導性が高く冷却が速い。つまり、仮に何らかの事故が起こっても大惨事を防ぎやすいというわけだ。

天然の資源であるウランの使用量を減らすこと

は、使用後に残る放射性廃棄物の減少にもつながる。つまり原子炉研究のポイントは次の二点に集約される。ウランなどの核燃料使用の効率化と、事故のときの安全性だ。この二点を劇的に改善したのが核融合炉だ。

従来の原子炉がいずれも核を分裂させることでエネルギーを得るのに対し、核融合炉はその名の通り核を融合させることでエネルギーを得る。核融合ではウランが使用されないため、使用後に高濃度の放射性廃棄物が残ることはない。また、核分裂による連鎖反応はなく、原発事故を通して私たちが知っている原子炉の暴走や、炉心融解は、基本的に起こりえない。ただ、こちらの炉が実用化されるまでには、第四世代原発の比にならない膨大な時間を要する。ゆえに核融合炉は、現在より力を入れて取り組まれるべき研究課題であり、日本を含む各国が巨額を投じてこれを支援している。イタリアでは現在、ブラジモーネでデル・ネーヴォ氏管轄のもと、研究が行われている。

だが、何から何まで順調というわけではなかった。デル・ネーヴォ氏とタランティーノ氏の話によると、研究は継続されていたものの、研究施設の運命は国の方針に大きく左右されたそうだ。左派ポピュリズム政党の五つ星運動（Movimento 5 stelle）と保守系の同盟（Lega）による連立政権が成立した 2018 年には、反原発を唱える左派の反対がありブラジモーネへの研究費が停止された。2022 年に右派政党イタリアの同胞（Fratelli di Italia）の党首ジョルジャ・メローニが政権を握ると、風向きが大きく変わり、現在では原子力発電に約 1 億ユーロの研究費が投資されており、ブラジモーネでは新しい設備を整えるための工事が進められている。さらに、研究の柱である鉛冷却高速炉は、イタリアのスタートアップ企業ニュークレオ（Newcleo）によって、2030 年から 2032 年を目途に、ルーマニアで建設される予定だ。1987 年の国民投票で真っ先に脱原発を果たしたイタリアだったが、ここにきて大きく原発再開に傾いている。この連載記事を始めてからの一年半のあいだでも、それを強く感じている。

会議室での解説の後、工事中の建屋も見せてもらった。基本的に古いままだが、ところどころ壁が塗り替えられており、真新しい巨大装置が雑然と設置されている。通訳ガイドとして何度かイタリア人グループを連れて日本の工作機械工場を訪問したことがあったが、それと雰囲気が似ていた。素人目には何のことやらわからない巨大な機械が、音を立てて動いており、そばのタッチパネルで作業員が何やら操作している。ここブラジモーネの研究施設は、1960 年代から続く人気クライム・アクション漫画を映画化した『ディアボリック』の撮影でも使われたらしい。どのシーンかは特定できなかったが、確かに古い建屋は 60 年代のヴィンテージ感と、過去に想像されてきた近未来の雰囲気が漂っており、『ディアボリック』の世界観にぴったりだ。

ちなみに現在は、研究者が約 60 名、工事関係者 15 名の体制で施設は稼働している。それぞれ住んでいるのはボローニャなどの都市部で、週末は家に帰り、平日はブラジモーネで寝泊まりしているらしい。敷地内に食堂がないので、食事は湖の反対側にある提携レストランでとるとのことだ。

実際に研究施設を目の当たりにして、研究者と話してみて、やや頓珍漢なことを言うが、ジブリの『風立ちぬ』に似ているなと思った。堀辰雄の小説をもとにした宮崎駿のアニメ映画で、主人公は戦闘機の開発に心血を注ぐが、それが戦争に利用され、犠牲者を出したことに落ち込む。この「戦闘機は好きだが、戦争には反対だ」という態度は、「イタリアげんぱつ紀行　その3」で取り上げた、原爆の父と呼ばれる科学者の映画『オッペンハイマー』にも似ている。人類の進歩に貢献する研究のはずが、人類史上最大とも呼べる悲劇を起こした。そこに研究者のジレンマ、苦悩がある。

アウシュヴィッツを生き抜いたユダヤ人作家プリモ・レーヴィは、化学者として塗料の工場に勤めながら執筆をしていた。理系文人ゆえに科学にまつわる著書も多く、まさしくこの研究者のジレンマについての発言も記録されている。1976 年にトリノで行われた講演会の質疑応答で、参加者から「研究者は自らの発見が応用されるなかで、どのような責任があるか」と質問されたレーヴィは、「先天的には罪のない研究がある」と答えた。そして「有罪と無罪という両極のあいだの、あいまいなケースが多数あり」、原子力のケースがまさにそれにあたるとも指摘している。面白いことに、レーヴィはそれに続けて、核融合によるエネルギー生産が 1990 年代に可能になると予見した物理学者の話を紹介している。現在では今世紀中の実用化を目指しているので、ここに 100 年の誤差がある。原子力発電の研究はそれほど容易ならざるということだろうか。

話が逸れてしまったが、少なからずブラジモーネの彼らにも、この研究者の態度に通じるものが

あると思った。研究に対しては純粋に情熱を傾けている。そして、いかに重大な事故が起ころうと、いかに国民投票で反対しようと、この研究の流れを止めることはできないとも感じた。

ところで私は前回「原発解体を進める SOGIN と原子炉研究を進める ENEA という不思議な構図が見られる」と書いた。ENEA 研究施設は多くの人の協力のもと、無事に見学することができた。では、SOGIN のほうはどうだろう。SOGIN の職員からは、また別の視点で原子力の話が聞けるのではないか。

（つづく）

【ブラジモーネの ENEA 研究施設】

（翻訳家、元当館語学受講生）

＜バイオリンに魅せられて＞

～4 人のクレモナ職人と演奏家で奏でる夢の世界～

聖地クレモナでバイオリン職人として腕を磨いた日伊を代表する 4 人の巨匠がこの日、イタリア会館で一堂に集い、バイオリン作りの魅力について語りつくします。
そして、イベントの最後は国内外で活躍するバイオリニスト馬渕清香さんによるとっておきのバイオリン演奏でお楽しみください。

・日　時: 2024 年 11 月 30 日（土） 13:30～15:30

・場　所: 芝蘭会館
（日本イタリア会館 京都本校より徒歩1分）

・定　員: 60 名（先着順）

・お申込み: 当館ホームページ、お電話

・料　　金: 2,000 円（一般、現受講生）
1,000 円（当館会員）

編集・発行 / （公財） 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/